

プロローグ

今日、訪問するクライアントは遠方で、一日がかりの営業になりそうだった。

「はるちゃん、行こうか。まだ、商談の時間までは余裕があるけど」

「はい！先輩！」

書類バッグを肩にかけて、後輩と一緒に会社を出る。後輩の名は、咲山春樹。みんなから、はるちゃんと呼ばれてる可愛い男の子だ。

「先輩、書類、重そうですね」

後ろから聞こえる声に振り返ると、はるちゃんが笑いながら私を見ている。
フワリとした髪形に、どちらかというと可愛い顔立ちで、少し背の高い男の子。

「車だから大丈夫よ」

「持ちますって」

「いいから」

手と手が一瞬触れそうになった瞬間に、とくん……胸の鼓動が一つ高鳴った。

「じゃ、行くよ」

「はい」

車内は静かで、タイヤの振動だけが響く。彼は助手席で書類を確認しながら、何気なく私のハンドルを握る手元に目を落とした。

見てる……？

最近、彼が私だけを見つめてるように感じ、意味もなくドキドキしてしまう。

まあ、気のせいだよね……。

それが分かったからといって、問題があるわけではない。それでも何故か、私の心はときめいてしまうのだった。

一度コンビニに立ち寄り、二人で飲み物を買った。私はつい、彼の唇を見る。つやつやで、可愛い唇。見てるのを悟られないよう、すぐに話題を切り出した。

「結構、遠いねー」

「ですね！」

「カーナビないと、無理だったわ」

営業先に着くまでの間、会話は少なめだが、助手席との距離が心をかき乱す。

ああ。なんで私、意識しちゃってるんだろう。

彼がどう思っているのか分からないけど、可愛いと思っている自分に戸惑う。

時おり見せる男らしい一面にドキツとしながら、よく一緒に外回りをしていた。今日のように二人きりで長時間一緒にいると、普段は感じない心のざわめきが、少しずつ膨らんでいく。

はるちゃん……。

私が彼を意識し始めたのは、数週間前くらいからだろうか？

「……先輩、無理しないでくださいね」

そのひとことに、自然と肩の力が抜ける。窓の外の景色はいつも通りなのに、二人だけの空間に変わったようで、私はそっと心臓を抑えた。

君は、私を……どう思ってるのかな……。

少しだけモヤモヤしながらも、二時間以上かけて遠方の客先に到着した。

「結構、遠かったわね。間に合ってよかった」

「そうですね。でも、先輩とのドライブは楽しいです」

「ドライブじゃない、仕事仕事！」

客先の会社の自動ドアを通ると、受付の人が私達を出迎えてくれた。

「遠い所、ようこそ！ お待ちしておりました」

「ありがとうございます」

優しいような受付の人に案内され、商談室に入ると、温かい空気が漂っていた。

「暖房入ってる。商談の準備してくれてたんだね」

「ありがたいですね」

「一応確認だけど、資料は大丈夫かな？」

「はい！ この資料です」

はるちゃんの声が耳元に届くたび、思わず肩が小さく震える。

「ありがとう、助かるわ」

私がそう言うと、はるちゃんはにつこり笑いながら資料を渡した。その瞬間、同じソファーに座る距離が、少しだけ縮まった気がして心臓が早まる。

コンコン。とお客様がいらっしゃった。二人で立ち上がり、挨拶をする。

「本日は、お時間を頂きありがとうございます」

「いえいえ、わざわざ遠いところに、足を運んでもらってありがとうございます」

お客様との商談はスムーズだった。そして私が、お客さんにペンを差し出す。

「では、ここにサインを」

私が少し身を乗り出した拍子に、はるちゃんと肩が軽く触れ合ってしまった。ほんの一瞬の接触なのに、くにゅとした感覚が走って、どきんとしてしまった。

「……あ……」

慌てて座り直すけど、はるちゃんは気にせずに書類に目を落としている。でも、視界の端で感じる彼の存在は、私の理性を少しずつ揺さぶっていく。

ダメだわ。商談の最中なのに……。

私の指先が資料の紙を握るたびに、微細な緊張が全身に広がる。

「先輩、大丈夫ですか？」

はるちゃんの声が小さく、耳元で囁いた。

「ええ、大丈夫よ」

冷静に答えながらも、心臓は小さく暴れている。先方が立ち上がったので、私達も立ち上がり、挨拶を交わした。

「では、ありがとうございました」

「こちらこそ」

スムーズな商談を終え、静かに客先を後にする。

「ふう」

「うまく行って良かったですね！」

外はまだ、午後の光が柔らかく差しっていて、街路樹の影が揺れている。

「天気が良くて、よかったですね！」

「本当ね。晴れ男なんじゃないの？」

はるちゃんと二人、駐車場で足並みを合わせるだけで意識してしまう。

「さ。帰ろ」

「はい」

車に戻り運転席に座る私のすぐ隣で、はるちゃんが助手席に腰を下ろした。彼の手が、突然ハンドルに触れる私の手の甲にかかり、指先に感覚が走った。息を呑む。こんな距離感、いつもならありえない。

「なっ……なに？」

「先輩、疲れてませんか？ ちょっと震えてませんでした？ 運転変わります？」

彼の優しい声が囁くように近くて、気持ちがぐらつく。

「ううん、大丈夫よ。ちよつと緊張しちゃった」

心臓がまだ落ち着かないまま、エンジンをかけたのだった。

第一章 車の中、背徳の時間。

車は客先を出て、途中の Pasta 屋さんで遅い昼食をとった。彼との会話は、普通だけど心拍数が上がってしまい、Pasta の味が半分ぐらいしか分らない。

「美味しいです！」

「そ、そうね。緊張してたから落ち着くわ」

そこで、はるちゃんがいう。

「らしくないですね」

いや……それはあなたのせいなの。

昼食を終えて、二人が車に乗り込むとき、はるちゃんが言う。

「運転変わりますよ」

「いい、大丈夫。慣れてるから」

「そうですか……」

車を走らせていると、はるちゃんの視線が私の手や肩に向くのが分かった。私の理性の縁が、ぎりぎりで揺れる。でも冷静を装って、運転を続けていた。

はるちゃん……絶対……見てるよね……。

ピピッ！　この先右です。

カーナビの方向指示に従い、私がハンドルを切る。

遠回りしたら……変だと思われるかな？

窓の外の街の景色は淡々としてるのに、車内の二人の世界は熱を帯びていた。手を握るわけでもなく隣にいるだけなのに、身体が知らないうちに反応する。はるちゃんが無意識の距離感で、私の心をくすぐっている気がした。

信号待ちで、車が止まる。

突然隣のはるちゃんの手が、私の手に触れる。

「えっ！」

心臓が飛び出してしまいそうに、驚いた。

「な、なに？」

「先輩、手、冷たいですね」

はるちゃんが小さく笑いながら、私の手の甲に、温かい指先を添えていた。指先に微かな熱を感じ、また心臓が高鳴る。

い、いやいや。いきなり手を握られたら、ちよつと……。

「そ、そう……？」

顔が熱くなるのを感じながらも、平静を装う。

「無理は、しないでくださいね。先輩、いつも頑張ってるから」
「ありがとう」

私の頬に、はるちゃんの視線が優しく刺さる。ただ運転しているだけなのに、彼は私の理性を少しずつ溶かしていく。

「大丈夫よ」

視線を感じたので、もう一度だけ念を押すように答える。

どういうつもりだろう？ 彼、私のことを意識している？ それとも素？

街の景色が流れる中、私の手のひらはハンドルを握りながら汗ばんでいる。
はるちゃんの指先の熱を感じ、そこに集中して、心の奥が甘くざわめく。

ちよ、ちよっと……手を離さないんだけど、なに？

営業の帰り道なのに、二人きりの車内は背徳的な密室の熱に包まれていた。

「……先輩」

小さく呼ばれた声に、息が止まりそうになる。

「はい？」

何気ない触れ合いが、胸の熱をどんどん引き上げる。はるちゃんが存在が、ただの後輩ではなく、知らず知らずのうちに、心を揺さぶる存在になっていた。

また、赤信号で車が止まる。

今度は、はるちゃんの手が私の肩に触れる。その距離の近さに、胸がじんと熱くなる。思わず肩を少し引くと、彼の視線が強く注がれるのを感じた。

もうこれ……気配りの類じゃない……。

「先輩……僕」

心臓がばくばくと跳ねる。思わず手元のハンドルを握る指先に力が入る。

「……はるちゃん？」

息がわずかに詰まる。平静を装おうとしても、胸の奥の熱は止められない。視線をそらそうとすると、彼は少し身を乗り出し、肩越しにじっと見て来る。

「ちよ……」

それだけで、理性が揺れる。

街の景色は淡々としてるのに、車内の時間は止まったかのように濃密だった。後輩なのに背徳的な存在となり、心と身体を揺さぶる魔法のように思える。

「……先輩、大丈夫ですか？」

「だから、大丈夫だってば」

こんな距離感、普段なら絶対にありえない。でも今だけは許される気がして、心がざわつく。信号が変わり、車がゆっくり動き出す。

やばい……なんで、こんなに優しいの？

はるちゃんの手が、また軽く私の腕に触れた。

嘘でしょ……なんで、急にこんなに……近づくの？

「先輩、手、汗ばんでいますよ」

低く優しい声。はるちゃんの指先が、私の手の甲にそつと触れる。

「ねえ……は、はるちゃん？ 私をからかてるの？」

「えっ？ からかってませんよ。心配してるだけです」

声に出してしまいそうな胸の高鳴りを抑え、視線を前に向ける。体は正直で、指先に伝わる刺激に反応してしまう。全てが背徳的で、甘い緊張を生んでいた。

「先輩、もう少して次の信号です」

「あ、ああ。そうね」

その声が耳元に近く、吐息が少しだけ私の髪に触れる。胸の奥がじんと疼く。

理性は、仕事だからと言いつけろ、体が勝手に反応してしまう。
ハンドルを握る手のひらは汗で微かに湿り、指先が敏感になっている。

「どうしたの？ はるちゃん。急に、もう大丈夫よ。落ち着いたら」
「ふふっ。そうなんですか？」

この背徳的なドキドキを、誰にも言えない。だからこそ、胸が甘くざわつく。

「ちよつと……」

国道から、人通りの少ない裏道に入る。流石に集中力を乱し車を停めると、
車内には静寂が漂い、外の世界から切り離されたような感覚になる。

「な、なによ。はるちゃん。急に」

「あ、あの……先輩……ここで少しだけ」

ちよつと、男の顔をして、トロンとした目つき。……欲情してる??

「えっ！」

はるちゃんの低く優しい声が耳に届き、胸の奥がとろとろと甘く熱くなる。
何をするわけでもないのに、その距離の近さだけで心臓は、ばくばくと跳ねる。

「絶対……からかってるよね？」

「からかってないですよ。だめですか？」

「いや、ダメっていうか……」

こんな地味な私に、触れて来るなんて。

「地味な先輩を、からかつちやダメでしょって」

「え。僕は先輩が、綺麗だっと思ってますけど？」

「うそだよ」

「本当です」

もう、ドキドキだった。めまいがしそうなほどに、気が動転している。

そして、はるちゃんは私の肩に手を寄せてグイっと、強引に引っ張ってきた。

「ちよっ！　ちよっ！　ちよっ！」

素直に助手席に体を寄せると、肩と肩が自然に触れ合う。息が重なる距離で、はるちゃんの指先が私の手首に触れ、熱を伝える。思わず小さく息を吐くと、胸の奥から熱い吐息が生まれた。

「……ねえ、ダメよ……」

声にならない声が漏れる。視線を逸らそうとしても、彼の瞳が優しく追う。そのまま、彼の指先がそつと手のひらに滑り込む。微かに皮膚に触れる感触が、熱く刺激して全身が熱を帯びる。

「手、汗かいてるから……」

「先輩、僕、我慢できなくて……」

耳元でささやかれ吐息が触れるたび、背中から腰までぞくつと快感が走る。
手を握り返すわけではないのに、体の反応は正直で指先が敏感に反応する。

「先輩……」

車どおりのない静かな裏道の車内で、二人の世界がゆっくりと濃密になる。
オフィスでは決して味わえない、背徳的で濃厚な距離だった

「あの、仕事中だから……ね。ねっ？」

はるちゃんの肩と私の肩がびたりと触れ、息がかかる距離で存在を意識する。
胸の奥がじんじんと疼き、手のひらの汗ばんだ感触がさらに熱を帯びる。

とくん……とくん……。

「……僕は、ずっと先輩を見てきました」

耳元でささやかれる低い声に、全身がぞくつと震える。

どういうこと？ 私を見て来た？ 確かに一緒に仕事してきたけど……。

「……は、はるちゃん！今は営業中だからさ」

声にならない声が漏れ、頬が熱くなる。彼の吐息が髪や首筋に触れてきて、胸の奥をぐるぐると甘くかき乱す。

「だから、先輩も我慢しなくていいですよ」

ささやかれるたび、甘い波が繰り返し押し寄せる。

「いや、我慢とかじゃなくてね……」

静かな裏道の車内、万が一、会社の人がこの道を通ったとしたら？

この背徳的で濃密な瞬間、理性と快感が絡み合い、瞳の奥で甘い火花が散る。肩と肩がぴったり触れ、腕や手首に伝わる彼の体温に、胸の奥が震える。

息が詰まり、胸がばくばくと高鳴る。

「……僕はもう、我慢できません」

思わず彼が吐いた言葉に、私はグッと手を押し返した。

「だめだってば！ はるちゃん」

ようやく、はるちゃんが離れる。

「とにかく、会社戻らないと」

「はい」

不満そうな声。

でも、ここで芽生えた甘く背徳的な想いは、これからの日常と二人の関係を、
ゆっくりと変えていく予感に満ちていた。

とにかく、会社に戻らなくちゃ……。ここから会社までは、まだ距離があるし。

これ以上、はるちゃんと居たら、おかしくなってしまうそうだし……。

「……先輩、そんなに緊張して運転しなくても、大丈夫ですよ」

はるちゃんの声が、静かな車内に響いた。ハンドルを握る私の手の震えを、彼は見ている。それが分かると、心臓がさらに強く打った。営業車のエンジンの低い振動が、私の乱れた呼吸の拍子と重なる。

「なんか、はるちゃん変よ？」

視界の端で、彼が動くのが見えた。そしてはるちゃんは、私に手を伸ばした。触れるか触れないかの曖昧な距離。その微かな予感だけで、全身に電流が走る。背徳感が私の理性の扉を叩く。運転中であり、今は仕事の途中だというのに。

「ふふっ」

二人の間にあるのは、社会人としての薄い壁。そして、赤信号に差し掛かる。

「…………だめ、今、運転中だから……」

かすれた声が漏れた。彼に届いたかどうか分からない。

「僕、止めませんよ」

優しく、しかし有無を言わせない返しだった。シートが、擦れる音がする。はるちゃんが、身体を僅かにこちらへ寄せ、彼の指が私の胸元に來た。

「こら、はるちゃん」

「ほら。先輩。触っちゃいますよ」

「だめだってば」

胸の服ごしに伝わってくる、彼の手の雰囲気にはたまらず身を避ける。

「は……」

自分の呼吸が、乱れる。触れる行為ではなく、触れようとするその空気が、

私の心臓を強く昂ぶらせた。

「はるちゃん、お願い、やめて……」

「車を、停めないでくださいね」

タイヤが、アスファルトを踏む規則的な音。車内では、二人の息の混ざる。彼の吐息が首筋に触れ、私のハンドルを握る手が、今度は意識的に震えだした。攻める年下の後輩と、理性を保とうと必死な、私の緊張が車内を満たしている。

「……先輩、信号、青ですよ」

はるちゃんの声で、現実に戻される。息が乱れたまま、アクセルを踏み込む。

視界が微かに滲む中、残ったのは、彼の熱の感覚だけだった。

「ちよっと、はるちゃん……手を、どけてよ……」

すると、彼はいたずらっ子のように笑う。

「運転中だから、抵抗できませんよね？」

ゾクツとする。

「何、バカな事いつてるのよ」

彼の指が、シートベルトの隙間からすべり込んできた。布のこすれる音。

すっ、ぞくっ。

はるくんが、服の上から胸の上に手を置いた。それだけで顔が真っ赤になる。

「あ……っ、だめ、ほんとに……っ」

「このまま揉んでも、我慢できるんですか？」

「や、やめっ……」

ハンドルを握る手が、ふるふる震える。思わずブレーキを踏みそうになる。

それでも彼は、その手をどけない。

「先輩、もう……冷静じゃないですよね」

「あ、当たり前じゃない……触っちゃだめよ」

「言う事は、聞きませーん。先輩のおっぱい温かい」

ふざけた囁きが、甘く刺さる。理性の糸が、ぷつんと音を立てて切れた。

「ちよっと！」

「……先輩、運転に集中して」

はるくんの声が低く響く。服の上から伝わる熱。

「っ……や、め……」

言葉が途切れる。ハンドルの感触よりも、彼の体温の方がはっきりわかる。

「僕のこと、見ててくださいよ」

呼吸が近づく。

たったそれだけなのに、胸の奥がずくと鳴る。車の振動が、鼓動と混ざる。赤から青へ変わる信号の色すら、遠く霞んでいた。

「ちよ、はるくん……危ないから。手をどけて」

「触ってるだけです」

「それがダメって言ってるの！」

そう言って、胸の上に置いている手をグイッと押しのける。

「はるくん！ 落ち着いて」

「いつの間にか、僕の事はるちゃん。じゃなくて、はるくんになってる」

そんな事言われても、こんなに男の部分を出されたら、そうなっちゃう。

次の赤信号で車が止まった途端に、はるくんの手の平にグッと力が入った。
今度はただ触れるだけではなく、指先で優しく揉むような感触。

「あ、だめ！」

体がビクツと反応し、ハンドルを握る手を思わず強く握り直す。

「えっ、だめなんですか？」

「当たり前じゃない！　は、はるくん……だめ……動かしちゃ」

ぐにゅぐにゅぐにゅ。と、はつきりと私の乳房を揉んで来た。

「うあ……」

声にならない小さな喘ぎが漏れる。彼は耳元に顔を寄せ、低く甘い声で囁く。

「先輩のオッパイ……柔らかいですね」

「柔らかいとかじゃなくて……」

「えっ？　先輩……声とか、我慢しないでいいですよ」

吐息が首筋にかかり、背中から腰までぞくつと熱が走る。手で胸を撫でられ、鼓動が高鳴るのを、彼に感じ取られるんじゃないかと思った。

「ちよつと……はるくん」

どうしたものかと思っていたら、次は指先が腰へ滑り、軽く太もものに触れる。思わず腰の奥が甘く疼き、理性と快感が交錯する。

「……あつ……や、やめ……」

抵抗しようとするたび、彼の手はさらに密着する。はるくんは思わせぶりに、その手をまた私の胸に戻す。また優しく、ぐにぐにと乳房を揉み始める。

「先輩の胸って結構あるんですね」

「だめ。はるくん……揉まないで。あぶないから」

車の揺れと信号の変化が、わたしのリズムを狂わせる。アクセルを踏むたび、指先の感触が胸に伝わり、吐息と心臓の音が混ざり合う。

「先輩……我慢してる顔も、可愛いですよ」

耳元で囁かれ、胸の奥が甘く跳ねる。もう、理性だけでは押さえられない。乳房を揉んでいた彼の手が太もものに触れ、さらに大胆に内側へ回る。その瞬間、体が勝手に反応してしまい、小さな震えが全身に広がった。

「……はるくん……っ、だめ、……」

それでも彼は、私から手を離さない。手の動きを優しく微妙に変えながら、密室の車内で濃密な時間を作り出す。信号待ち、タイヤの振動、吐息の交錯。すべてが甘い背徳感と快感のリズムになり、私の理性をじわじわと崩していく。

次に、赤信号で車が止まったとき、はるくんの手がスーツの上からではなく、すーっと服の下から、滑り込むように入ってきた。そして私のシャツを掴み、グイッとスカートから引き出される。

「だめ！ はるくん」

唐突にシャツの裾を掴まれたと思えば、それをおもいつき引き上げられた。周りに走っている車がいるというのに、私は半分ブラジャーをさらけ出される。

「先輩の乳首、直に触っちゃおっと」

「ちよっ！　ちよっとお！」

とはいえ、運転中なのでハンドルから手が離せず、片手で胸を庇おうとした。でも真っすぐ指先がブラに伸び、グイッと押し上げて来る。乳首に触れる瞬間、体がびくつと反応し、ハンドルを握る手に思わず力が入る。

「は、はるくん……っ、触っちゃだめ……」

声にならない喘ぎが漏れる。はるくんは私の耳元に顔を寄せ、低く甘く囁く。

「先輩……乳首きもちいいんでしょ？」

くりゅっ！　と乳首をつままれた。

「まって！　はるくん！　だめだって！」

吐息が首筋にかかり、腰までぞくつと熱が走る。乳首をねじられるたびに、指先の刺激がじんわり全身に広がり、なけなしの理性が少しずつ溶けていく。ハンドルを握る手が固く握られ、乳首からの快感に耐えた。

「……あつ……や、やめ……」

抵抗しようとしても、はるくんは微笑むだけで、さらに服の下で手を動かす。指先が乳首をつまむように触れるたびに、小さな吐息が漏れ、心拍数があがる。車の揺れ、信号の変化、吐息が私の背徳感を煽って、理性と快感が交錯する。

「……はるくん……っ、だめだつてば……運転……してるんだからあ」

それでも、彼の手は乳首から離れず、密室の車内で甘く濃厚な時間が流れる。息づかい、体温、指先の刺激、すべてが私をじわじわと快楽に溺れさせていく。

55

「先輩の乳首、初めて触っちゃった。まだ、会社までは遠いですよね？」

「ちよつと……はるくん……もうやめてよ」

「もつと、抵抗しないんですか？」

「運転中は、危ないでしょ！」

「そっか、そっか」

いたずらな笑みを浮かべ、私を挑発しているかのよう。信号が赤に変わり、視界の端で、はるくんが微笑んでいる。その笑みが、何よりも危険だった。

「先輩、そんな顔してると……」

「……どんな顔？」

「僕、見てるだけで、我慢できなくなります」

鼓動の音が、車内のエンジン音と重なっていく。体の奥で、熱が上がる。

彼の暴走を、止めたい。けど、止めたくない。

矛盾が、理性の奥でじわじわ暴れ始める。はるくんの声が、さらに低くなる。まるで彼は、囁きでこちらの判断を奪おうとしているように。

「先輩、運転、上手ですよね」

「……今は、そういう話……してない」

「だって、こんなに震えてるのに、ちゃんと運転してる」

彼の指先が、乳首を強くつまんだ。

「あっ……」

「青ですよ」

アクセルを踏むたび、車が揺れる。リズムが、何かを煽るように一定だ。

「だ、だめよ。はるくん」

はるくんが、ふっと息を漏らす。それだけで、世界の音が遠ざかる。

「先輩の乳首、硬くなってきちゃった」

「触っていいなんて、ひとことも言っていない！」

「でも、逃げないじゃないですか……てか、運転してるから逃げられないか」

「ほら。もう満足でしょ……」

「全然、満足しません。もっと、エッチな気分になってきました」

もー！　ちよつと！　何やってるの……。そう心で思うが、何故か抗えない。

「か、会社の近くに行ったら、止めてくれる？」

「どうしようか、迷い中です」

「だって、会社の人に見られちゃう」

「じゃ、回り道しましょ」

私がさっき思ってたこと、だけどころなるなんて事は全く想定してなかった。私はただ、少しだけ長くおしゃべりしたかっただけなのに。するとはるくんが、乳首から手を放して、カーナビをぴっぴっ！ と操作し始める。

「な、なにしてるの？」

「ほら。これで、遠回りです」

「そ、そんな勝手に」

「でもカーナビに従ってください」

余計に、遠回りする事になってしまった。

「はるくん……だめよ……」

「ほら、運転に集中してください」

「しゅ、集中……って」

すると今度は、はるくんの手がするりとスカートの上に伸びた。その動きは、あくまで自然で何気ない仕草のよう。だけど、私の心臓はそれを許さなかった。